

ノルウェー語南東部方言のアクセントの再検討 -アクセント論の視点から-*

三村 竜之

Tunes and Tones in South-eastern Norwegian Reconsidered from Accentological Viewpoint

Tatsuyuki MIMURA

要旨：ノルウェー語南東部方言では、語は主強勢を担う音節を必ず一つ有し、その音節には（主として）「低平調」（アクセント 1/Acc1）と「下降調」（Acc2）の二種類の音調が現れる。従来の研究では第一音節に主強勢を有する二音節語に考察の対象がほぼ限定されており、アクセント音調の本質を捉えきれていなかった。これを踏まえて拙論（三村 2005）では、先行研究に欠けていた多音節語や句、文の音調の精査を通じて、アクセント対立において真に弁別的な特性は主強勢に対する下降調の時間的な位置の差異であると結論づけた。しかし、その後の調査で明らかとなった Acc1 の音調の変異型が拙論の解釈案では説明することができないという新たな問題点が生じた。この問題点を解決すべく、本研究では、語よりも大きな構造体の音調を精査することで音韻論的に有意義ではない音調（広義イントネーション）の分離と理論的な位置付けを行い、その結果、アクセント対立において真に弁別的な特徴は主強勢を担う音節における下降調の有無のみである結論づける（Acc1: 下降無し; Acc2: 下降有り）。Acc1 を語彙レベルで下降調を指定しない「無標」と捉えることで、低平調以外にも現れうる音調の変異型の存在や、同系統の言語や諸方言との間の通時的なアクセント対応の説明が可能となる。

キーワード：Acc1 と Acc2, アクセントの抽出, 非関与的な音調の分離, 下降調の有無, 音調的ストレスアクセント, リズム単位, 単位音調

* 本稿は、第 14 回音韻論フェスタにおける口頭発表（三村 2019a）ならびに北海道言語研究第 17 回研究例会における口頭発表（2019b）にて配布したハンドアウトが基盤となっている。また、一部、デンマーク語に関する議論は、国立国語研究所プロジェクト共同研究プロゾディー班（理論・対照研究領域「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」；代表者：窪菌晴夫教授）の研究発表会における口頭発表（三村 2021b）に基づいている。左記の口頭発表にて貴重な助言やコメントを下された聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼をお申し上げる。

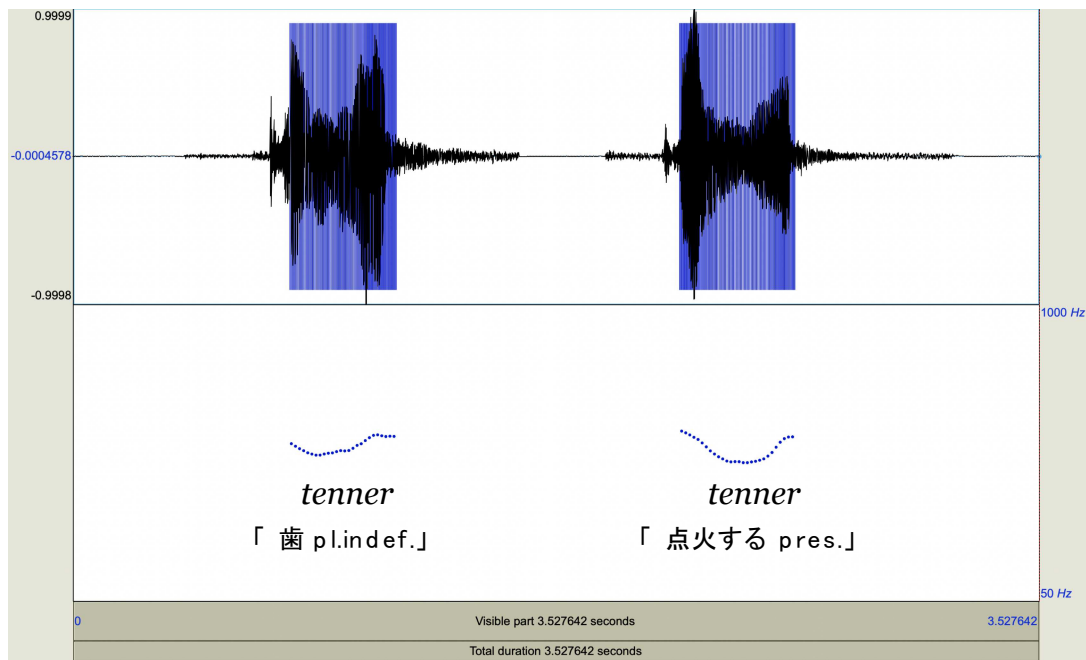


図 1: (1a)の最小対のピッチ曲線 (三村 2021b)

1 序論

1.1 本研究の背景と目的

ノルウェー王国の首都であるオスロ(Oslo)の方言に代表される南西部方言を含め、多くのノルウェー語の方言では、主強勢を担う音節に二種類の音調が現れる。ノルド語(北ゲルマン語)研究の伝統的な用語ではこの二種類の音調をそれぞれ「アクセント 1」と「アクセント 2」と呼ぶ(以下、それぞれ Acc1・2 と記す)。それぞれの音調の具体的な型(調値)は、個々の方言によって異なりうる。本研究の対象である南西部方言では、Acc1 は(主として)低く平らな音調(低平調)が、Acc2 は下降調が現れる。具体例を以下に示す¹(三村 2005; 図 1 のピッチ曲線² (三村 2021b) も参照のこと):

(1)

Acc 1	Acc 2
a. <i>tenner</i> [t ^h ɛ̃n.nə̃] LH 「歯 pl.indef.」 (< <i>tann</i> [t ^h ánn ɿ] 「歯 sg.indef.」)	<i>tenner</i> [t ^h ɛ̃n.nə̃ ʋɿ] 「点火する pres.」 (< <i>tenne</i> [t ^h ɛ̃n.nə̃ ʋɿ] 「点火する inf.」)
b. <i>dyret</i> [dý:rə̃] LH 「動物 sg.def.neut.」 (< <i>dyr</i> [dý:r̥] R) 「動物 sg.indef.」)	<i>dyre</i> [dý:rə̃] FH 「高価な adj.def.」 (< <i>dyr</i> [dý:r̥] R) 「高価な adj.indef.」)

¹ 音声表記は全て国際音声字母を用いた簡略表記である。ここでは引用元の拙論(2005)に倣い tone letters をそのまま残したが、以後、本稿では次の記号を用いて音調を表記する: F (下降調 falling tone), H (高平調 high level tone), L (低平調 low level tone), M (中平調 middle level tone), R (上昇調 rising tone)。なお、これらの記号は各音節の音調の概形を(音韻解釈を経たのちに)抽象的に示したものに過ぎず、従って、仮に同じ記号で表記された音節であっても、厳密な意味での調値は異なりうる点にくれぐれも留意されたい。略号は次の通り: adj. 「形容詞」, def. 「既知形(英語の「定冠詞+名詞」に相当する形式)」, indef. 「未知形(英語の「不定冠詞/無冠詞+名詞」に相当する形式)」, inf. 「動詞不定形」, neut. 「中性形」, pl. 「複数形」, sg. 「単数形」。

² ピッチ曲線の抽出には Praat (Boersma and Weenink 2021, Version 6.1.54)を使用した。

南東部方言も含め、Acc1 と Acc2 の対立を持つノルウェー語諸方言の音調を科学的ないし学術的に捉えようとする試みは 1800 年代中頃には既になされている(例: Aasen 1848)。1900 年代前半頃までは Acc1 と Acc2 のそれぞれの音調を独立した型(調素 *toneme*)として捉える立場がほぼ主流であった。しかし、1900 年代後半以降、生成音韻論に端を発する種々の音韻理論、特に自律分節音韻論(*autosegmental phonology/theory*)の誕生と発展に伴い、現代では、Acc2 のみが音韻論的には(基底形/レキシコンのレベルでは)具体的な音調が指定(*specify*)され、Acc1 の音調は音韻論的には無指定(無標)の状態であり、具体音声としては「イントネーション」が実現したもの、と解釈するのが一般的である(例: Kristoffersen 1993)。

後ほど詳述する通り、筆者自身も、Acc1 の音調を無標と捉える解釈に賛成ではあるものの、議論の微細な展開しては意見を異にする。とりわけ次に示す二点は先行研究に関して解消しなくてはならない重要な理論的問題点であると筆者は考える: i) Acc1 の具体音声として実現したものと解釈する「イントネーション」とは一体何か、南東部方言の音韻論全体の中でどのような位置付けがなされるものなのか、本質的な側面は全く明らかとなっていない; ii) 南東部方言の音韻論全体における強勢(ストレス *stress*)と Acc1/2 の音調との関係はいかなるものか、また二つの異なる韻律体系の併存なのか否かが明らかとなっていない。

これらの問題点を解決すべく、本稿では、南西部方言の一つである Sandnes (サンネス)方言に関して既に筆者が公にした「アクセント論」(三村 2014; 詳細は(第 2 節を参照)的な分析手法を、筆者がフィールドワークを通じて採取した南東部方言の一次資料にも応用し、真に音韻論的に(基底形/レキシコンのレベルにおいて)有意義な特徴は何かを、また先行研究が「イントネーション」として位置付けた音調の理論的な位置付けや本質を解明し、強勢をも含めた南東部方言のアクセント体系の構築を試みる。

1.2 本研究が対象とするノルウェー語

ノルウェー語はノルウェー王国(人口 5,415,166 人(2021 年 11 月時点; 典拠: *Statistisk sentral-byrå*))の公用語の一つ。印欧語族ゲルマン語派北ゲルマン諸語の一つ。山勝ちの地形故に地理的な方言差が大きく、概略すると、西部の方言は系統的に最も近いアイスランド語と多くの類似点を有する一方で、東部方言、特に本研究が対象とする南東部方言は、ノルウェーとデンマークとの間の歴史的な繋がりを反映してデンマーク語と共通する点が多い。

なお、本研究において扱う南東部方言は、後述する通り(1.5 節を参照)、首都 Oslo 市ならびに近隣の都市で生育した母語話者 2 名をインフォーマントとして資料を採取しており、その意味では Oslo 方言として扱うことも可能である。しかし、伝統的な Oslo 方言において報告されている特徴³が観察されていないことから、またインフォーマントの年齢を考慮すると、本研究で扱うノルウェー語は Oslo 方言を基盤とした一種の地域共通語的な変種と見なすのが妥当かもしれない。以上の理由から、本研究の記述対象を Oslo 方言ではなく広く南東部方言と呼ぶことにする。

³ 例えば、標準語の正書法で L で綴られる音は、筆者の資料では(舌尖・反り舌の)側面音で現れるが、伝統的な Oslo 方言では(舌尖・反り舌の)弾き音で現れる。

1.3 音声・音韻的特徴

本小論考での議論の理解を促すべく、ノルウェー語南東部方言の音声ならびに音韻的特徴について極く簡単に概略を述べておくこととする。まず、暫定的ではあるものの、現時点で筆者が設定している母音音素ならびに子音音素の目録を以下に示す：

(2) 音素目録（暫定版）

a. 母音: /i, e[e^h~[ɛ](~[ə]), æ, a[a~[ɑ], y, u, ø[ø]~[œ], u, o[o]~[ɔ], (ə)/



– [ə](/ə/) は強勢（ストレス）とは共起しない。

– 具体音声のレベルでは母音量の差異は確認しうるが、母音量の点で対立する語はない。母音量を音韻論的に指定せず音節構造から導くことも可能。

b. 子音: /p[p^h~[p], t[t^h~[t](~[t]), k[k^h~[k], b, d[d](~[d]), g, f, v[v]~[v], s, ʃ, ç, h, r[r]~[r̥], w[w]~[w], j[j]~[j], l[l]~[l]~[l̥](~[l̥]), m, n[n](~[n]), ŋ/

アクセントは（南東部方言のみならずノルウェー語全般に該当することであるが）いわゆるストレス（強さ/強弱）アクセントであり⁴、音節数を問わず、語には主強勢を担う音節が必ず一つ存在する。語における主強勢の位置はほぼ予測可能ではあるものの、主強勢の位置の違いで対立する語例もわずかに存在する。なお、単純語（単一の形態素からなる語）の場合は、主強勢は後ろ（右）から数えて三つ目までの音節（末尾(ultimate)、次末(penultimate)、前次末(antepenultimate)音節）のいずれかに置かれる。強勢を担う音節は、開音節であれば母音は（音声的に⁵）長く、閉音節であれば末尾子音(coda)は二つ以上必要である。

1.4 Acc1 と Acc2

既に冒頭にて導入済みの用語ではあるが、Acc1 と Acc2 という用語はノルド語学においてしばしば多義的である。従って、本節ではこの用語に関して若干の補足を行う。

そもそも Acc1 と Acc2 という用語は、ノルド諸語の内、ノルウェー語、スウェーデン語、デンマーク語の三言語において（諸説あるものの）早ければ約 6 世紀から 8 世紀頃には発生していたのではないかと推定される(e.g. Oftedal 1952)二種類の「アクセント」を指す用語である（ゲルマン祖語や印欧祖語にまで起源を遡る立場もあり: cf. Jensen 1961: 18）。この場合の Acc1 と Acc2 とは、歴史的に同一の起源に遡ることの可能なノルド語諸方言の二種類のア

⁴ 本来ならば厳密な論証を経ることなく、南東部方言がストレスアクセントの言語であると断言してはならないが、ここでは便宜上、ストレスアクセントの言語であることを自明のこととして話を進めた。詳細は稿を改ざるを得ないが、論証の要点を示すと次の通り: i) 語の音節数（や、単独での発話の場合は品詞の別も）を問わず語は必ず一つ、聴覚的に卓立した(prominent)音節を有する; ii) 卓立のある音節は、卓立のない他の音節と比べて次の特徴を有する: a) 常に非軽音節であり（常に短母音を核とする開音節(CV)以外の構造を持ち）、音節頭音(onset)や音節末音(coda)の位置に子音連結が現れる傾向が強い、b) 母音の弱化は起こらず、また対立する母音の数が多く、c) onset 初頭の閉鎖音の気音が強く、また coda の子音は弱化や脱落の傾向が乏しい、d) (複合等を形成し、卓立/強勢の度合いが下がらない限り) 遷移や高さの決まった音調が現れる。なお、ストレスアクセント言語とされる全ての言語が上記の諸条件を満たすわけではなく、あくまでもノルウェー語南東部方言（のみならず多方言に関しても）において該当するものである旨に留意されたい。なお、本稿では、主強勢の置かれた音節の綴り字を大文字で記す表記法も適宜とすることとする: *TENne*「点火する」。

⁵ ここではあくまで具体音声の問題にしている点に留意されたい。なお、詳細は稿を改めざるを得ないが、筆者は、母音量が音節構造から導くことができるため、長母音音素は不要であると考える。

アクセントにそれぞれ与えた「レットル」に過ぎず、それぞれの言語（ないし方言）におけるアクセントの具体的な音声実質は考慮されていない。

歴史的な変遷の後、それぞれの言語や方言において Acc1 と Acc2 の具体的な音声実質は変化を遂げ、例えば（後述するように）本稿において扱う南西部方言では Acc1 は「(主として) 低平調」、Acc2 は「下降調」として現れるが、デンマーク語（コペンハーゲン方言のほか多くの方言）では Acc1 は *stød* と呼ばれる「声門化 (laryngealization)」や「きしり声 (creaky voice)」の一種として現れ、その一方で Acc2 は *stød* の無い状態として現れる。

このように、個々の言語や方言に関して用いた Acc1 と Acc2 という用語は具体的な音声実質を伴っており、従って、Acc1 と Acc2 という同じ用語を用いているとはいえ、それぞれが指し示す現象や具体的な音声実質は大きく異なりうる点に注意が必要である。

本稿では、ノルド語学の慣習に倣い便宜的に Acc1 と Acc2 という用語を用い換するものの、その具体的な音声実質はその他のノルウェー語諸方言やノルド諸語におけるものとは異なる点に十分に留意されたい。

1.5 インフォーマント・調査の概要

本研究の基盤となる資料（データ）は、特に断りがない限り、全て次の2名の母語話者をインフォーマントとして行ったフィールドワーク（聞き取り調査）を通じて採取した。以下に各インフォーマントに関する情報を示す⁶。

一人目は Ine Marianna Hareide Nordbø 氏。1978 年首都 Oslo 市生まれの女性。言語形成期を同市で過ごし、Oslo 大学入学後の日本留学までは外住歴はない。調査当時（2002 年 6 月から 2003 年 7 月）は東海大学湘南キャンパスに留学中。同期間に計 33 回（一回につき大体 1～2 時間程度のインタビュー形式）の調査を実施。場所は同大学の空き教室や留学生用宿舎を利用した。主として、アジア・アフリカ言語文化研究所(1967)を用いた基礎語彙調査（約 1200 項目採取）や二音節以上の外来語、特に第二音節以降に主強勢を持つ外来語並びに複合語のアクセント資料を採取した。また、Nordbø 氏との調査では、句や文の発話資料も採取した。氏はノルウェー語の他にも英語の運用能力があり、調査の際の媒介言語には英語を使用した（日本語の運用能力に関しては未確認）。

もうお一方は Siri Strømme Johansen 氏。調査当時（2005 年 4 月から 6 月）、ご自身の研究が多忙を極めており調査を 4 回で打ち切ることとなってしまったため、Johansen 氏の出生年、出生・生育地に関しては、Oslo 近隣の都市であることを除いては全て未確認である。当時、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻に所属しており、調査は同大の施設（例えば、文学部言語学研究室）や空き教室にて行った。日本語を含めた他言語の運用能力に関しても未確認で、調査には媒介言語としてデンマーク語を使用した。先述の Nordbø 氏との調査の追加・

⁶ インフォーマントに関する情報の公表については、既にお二方から快諾を得ていることを付記しておく。なお、次のお二方はインフォーマントとの仲介役として筆者の研究調査を支えて下さった：田熊偉良氏（当時・東海大学交際交流課）、長屋尚典氏（当時・東京大学言語学研究室）この場をお借りしてお二方のご尽力に心よりお礼を申し上げる。

確認の目的で調査を行い、特に第二音節以降に主強勢の置かれる固有語（派生語）や外来語のアクセント資料の補充に主眼を置いた。

2 アクセント論的アクセント観

既に拙論(三村 2014)において詳述してはあるが、本稿における筆者の議論を適切に理解してもらうためには必須の概念であるため、重複の誹りを受けつつも改めて筆者の唱える「アクセント論」とはどのようなものか、そして筆者の考える「アクセント」とは何かについて述べておくことにする⁷。

「アクセント」という用語を用いて何を意図するかは研究者により微妙に異なることがあり、また言語の音声的側面を扱う音声学と音韻論の間でも「アクセント」の概念は異なることがある。さらに、仮に音韻論の領域に限定したとしても、研究対象とする言語が異なれば、アクセントという用語の意図する概念が異なることもある。そこで本節では議論の出発点として共通の理解を図るべく、筆者の唱える「アクセント論」的なアクセントの捉え方について述べておく。

筆者の考える**アクセントを一言で述べるならば**、特定の言語社会において慣習的に共有された、ある音声特徴を利用して実現される語の「音形」である（なお、ここで「語」と呼ぶものは、厳密にはアクセントを担うまとまり、いわば「アクセント単位」とでも呼ぶべきものであるが、議論が煩雑になるのを防ぐために、ここでは便宜的に「語」という用語を用いる）。従って、アクセントが個々の言語において具体的に実現する際の音声実質は、アクセントそれ自体を定義する上では重要ではない。典型的には、例えば日本語に代表される「(音の)高さ/ピッチ」や英語に代表される「(音の)強さ/ストレス」といった音声特徴が利用されるが、先に述べた機能が果たされる限りにおいては、「声門狭窄」や「喉頭緊張」、「(音の)長さ/量 (quantity)」といった音声特徴であっても理論的には可能である。

また、利用される音声特徴は、**語を構成する分節音（語音）の情報から規定されるものではない**。無論、アクセントの具体的な実現には分節音が影響を与えることはありうるが、アクセントの本質的な部分は分節音に固有の音声特性とは切り離されるものである。だからこそ、言語によっては、アクセントが語の知的意味の弁別に寄与しうるのである。

なお、このような「弁別（的）機能」はアクセントの主たる機能ではなく、むしろアクセントが有する本来の特性から派生的に生じた、いわば副次的な機能であると筆者は捉えている。というのも、仮に、超分節的特徴によって作られた「型」が一種類しか無く、従って最小対が存在しない場合であっても、その「型」を分節音の特性から導き出すことができない以上、分節音のレベルとは独立した自律的なものとして、つまりは「アクセント」として捉えられるからである。「型」の対立により知的意味の弁別がなされなくとも、歴とした「型」

⁷ こちらも既に拙論 (三村 2014: 79 注 4) にて記したが、ここで筆者が説く「アクセント論的アクセント観」は次の研究からその着想を得ている: 上野善道(1980, 1989, 2005 等)に代表される日本語諸方言アクセントの記述研究におけるアクセントの捉え方、並びに氏の理論に影響を与えたと考えられる川上夔の一連の論考 (川上 1995)。なお、前掲拙論における「川上 1995」の記述は筆者の誤り。

は存在するのである。

本稿の主題との関連で留意すべきは、筆者がここで「型」と呼ぶ「分節音のレベルとは独立した自律的な音形」の全てがアクセントではないという点である。アクセントの「型」は確かに語全体に被さるものではあるが、その「型」は語のある一か所に現れる本質的な特徴によって導き出すことができると考える。この点でアクセントは、例えば中国語北京方言に見られるような、語を組み立てる音節のそれぞれに音韻論的に有意義な音声特徴の現れる「声調 (tone)」とは異なる性質を有する。

このアクセントが有する本質的な特徴、すなわち音韻論的に真に有意義な特徴は、例えばイントネーションなど、少なくとも語レベルでは音韻論的に指定 (specify) する必要のない特徴を分離することによって初めて得られるものと考えられる。つまり、我々が実際の発話において観察することができる現象は、実はアクセントの上にイントネーションなど様々な音声特徴の被さった結果生じた重層的な物であり、従って、単に語が単独で発音された際の音形を観察しただけではアクセントを導くことは不可能なのである。あらゆる環境や条件における音形を観察して分析を進め、様々な特徴を分離することによって、アクセントとして真に弁別的な属性を「抽出」しなくてはならないのである。

3 問題の所在

3.1 アクセント資料

既に触れた通り、ノルウェー語南東部方言では、語は主強勢の現れる音節に（主として）低平調と下降調の現れる場合の二通りの型がある。また、語末の音節が主強勢を担う場合は、前述の二つの場合とは異なる型の音調が現れる。以下、これら三つの場合に分けて、具体的なアクセント音調の型を示し、精査していくこととする。

3.1.1 主強勢の置かれた音節に下降調が現れる語

まず、主強勢を伴う音節に下降調が現れる語⁸について見ていく。(3)の表を参照されたい。(3)の表は、主強勢の置かれた音節に下降調の現れる二音節以上の多音節語を、縦軸に示した主強勢の現れる位置（左から数えて何番目の音節か; 1st., 2nd.等々で表す）と横軸に示した語の音節数（ONE, TWO等々で表す）に基づき整理したものである。なお、網かけの箇所は構造的に語例が存在しないことを、また「-」の箇所は語例が確認されていないことを示す⁹：

⁸ 「主強勢を伴う音節に下降調が現れる語」とは、要は Acc2 の語のことである。現時点ではアクセントの抽象化作業を未だ経てはならず、ノルウェー語南東部方言に現実に観察される音調の具体例を示す段階に過ぎないため、遠回りで繁雑に響くという誹りは承知の上で、敢えてこのような述べ方を行なった。なお、同じ理由から、第 3.3.2 節並びに第 3.3.3 節では、いずれも抽象化・解釈作業の結果、Acc1 の語として分析される語を、「主強勢の置かれた音節に主として低平調の現れる語」、「一音節語を含む末尾音節に主強勢の現れる語」として具体例を提示する。

⁹ アクセント解釈や抽象化作業の詳細は第 5 節に示すが、末尾音節に主強勢の置かれる語は全て Acc1 の語と解釈される。従って、(3)の表では末尾音節に強勢の置かれる語の箇所が全て「-」で示されている点に留意されたい。

(3) 主強勢の置かれる音節に下降調の現れる語の音調型

	ONE	TWO	THREE	FOUR	FIVE . . .
		<i>hake</i>	<i>albue</i>	<i>pekefinger</i>	<i>sommerferie</i>
1st.	—	[h ^h á:kə]	[áɫ.bu.ə]	[p ^h é:kə.fiŋ.ŋəɕ]	[só.m.mə.feɪ.ri.ə]
		FH 「顎」	FLH 「肘」	FLLH 「人差し指」	FLLH 「夏休み」
			<i>marine</i>	<i>allikevel</i>	<i>marinesoldat</i>
2nd.	—		[ma.ri:nə]	[a.ɭi:kə.veɭ]	[ma.ri:nə.suɫ.dɑ:t]
			MFH 「海軍」	MFLH 「しかしながら」	MFLH 「海兵」
				<i>marmelade</i>	<i>Filippinene</i>
3rd.			—	[mar.mə.lá:də]	[fi.ɭi.p ^h í:nə.nə]
				MMFH 「マーマレード」	MMFLH 「フィリピン」
					<i>humaniora</i>
4th.				—	[hu.ma.ni.ú:ra]
					MMMFLH 「人文科学」
5th.					—
:					

(3)の表に示した語例から、主強勢の置かれる音節に下降調の現れる語の音調に関して次の三点を指摘することができる: (i) 主強勢の置かれた音節に先行する音節には、その数を問わず、中平調(M)が現れる (例: *maRIne* [MFH], *marmeLAdE* [MMFH]; 大文字で記した音節で主強勢の所在を示す); (ii) 主強勢を伴う音節に後続する音節には、末尾音節である場合を除き、その数を問わず全て低平調(L)が現れる (例: *ALbue* [FLH], *PEkefinger* [FLLH]); (iii) 末尾音節には高平調(H)が現れる。なお、紙幅の都合から、また表記が煩雑になるのを避けるため表中の語例に反映させなかったが、末尾音節の高平調は上昇調(R)に置き換わることもあり、インフォーマントの内省観察ではいずれの場合も許容される。

また、若干、アクセント解釈に踏み込むことになってはしまうが、(4)に示すように、主強勢を担う音節が「短母音+阻害音(obstruents)」という構造を有する場合は下降調の代わりに高平調が現れやすい傾向にある:

- (4) *snakke* [snák.kə H(~F)H] 「話す」
cf. *smake* [smá:kə FH] 「味がする」

一方、主強勢を担う音節が長母音を有する場合 (例: *SMAke*) では下降調以外の音調はインフォーマントから許容されなかった。

3.1.2 主強勢の置かれた音節に (主として) 低平調が現れる語

続いて、主強勢を担う音節に主に低平調(L)の現れる語を見ていく。(5)に示す表を参照され

たい（語例の整理の方法は、前節の(3)の表と同様；なお、表の空白の箇所は、末尾音節に主強勢の置かれる場合で、第 3.1.3 節にて扱う）：

(5) 主強勢の置かれた音節に主に低平調が現れる語の音調型

	ONE	TWO	THREE	FOUR	FIVE . . .
1st.		<i>skulder</i> [skú].døɕ] LH 「肩」	<i>ananas</i> (sic) [án.na.nas] LLH 「パイナップル」	<i>verdensrommet</i> [væ̀r.dəns.rum.mə] LLLH 「宇宙」	<i>fødselspermisjon</i> [fø̀d.sø̀s.pæ̀r.mi.fu:n] LLLLH 「産休」
2nd.			<i>piano</i> [pi.á:nu] MLH 「ピアノ」	<i>Amerika</i> [a.mé:ri.ka] MLLH 「アメリカ」	<i>familienavn</i> [fa.mí:li.ə.navn] MLLLH 「姓名」
3rd.				<i>personale</i> [pæ̀.ʃu.ná:tə] MMLH 「人員」	<i>kafeteria</i> [ka.fe.tʰé:ri.a] MMLLH 「カフェテリア」
4th.					<i>memorisera</i> [me.mo.ri.sé:re] MMMLH 「記憶する」
5th.					
:					

(5)に示した語の音調を精査した結果、前節の(3)の語例と同様に、次の三つの特徴を指摘することができる：(i) 主強勢の置かれた音節に先行する音節には、その数を問わず、中平調(M)が現れる（例： *piAno* [MLH], *persoNAle* [MMLH]）；(ii) 主強勢を伴う音節に後続する音節には、末尾音節である場合を除き、その数を問わず全て低平調(L)が現れる（例： *ANanas* [LLH], *VERdensrommet* [LLLH]）；(iii) 末尾音節には高平調(H)が現れる。なお、こちらも(3)の語例と同様、紙幅の都合や表記が煩雑になるのを避けるため表中では割愛したが、末尾音節の高平調は上昇調(R)に置き換わることもあり、いずれの音調を用いてもインフォーマントの内省観察では許容される。

また、こちらも表記が煩雑になるため(5)の表中には逐一反映はさせなかったが、主強勢の置かれた音節には低平調の他に軽微な下降調 (fで示す) も現れることが、Johansen 氏との調査から明らかとなった(次頁の図 2 も参照のこと；矢印の箇所に軽微な下降調が生じている)：

(6)¹⁰ a. *vinter* [vín.təɕ] LH~ fH 「冬」

b. *begynnelsen* [bý:r.nə].sən] LLH~ fLH 「始まり sg.」

¹⁰ ここで引用した *begynnelsen* には第二音節に主強勢の置かれる型(*beGYNnelsen*)もあり、筆者の採取した音形は無強勢の第一音節 *be-*の母音が脱落した後続音節の *-gyn-*と結合した音形と推察される。インフォーマント(Johansen 氏)の内省観察では、むしろこちらの音形の方が自然とのことであった。なお、南東部方言を扱った発音辞典である Vanvik (1985)はいずれの音形も挙げており(p.40)、筆者の採取した音形の方に Acc2 の記号を付している、筆者の調査した限りでは、Acc2 の語に観察されるような「大きな」下降調による発音ではインフォーマントから許容されなかった。

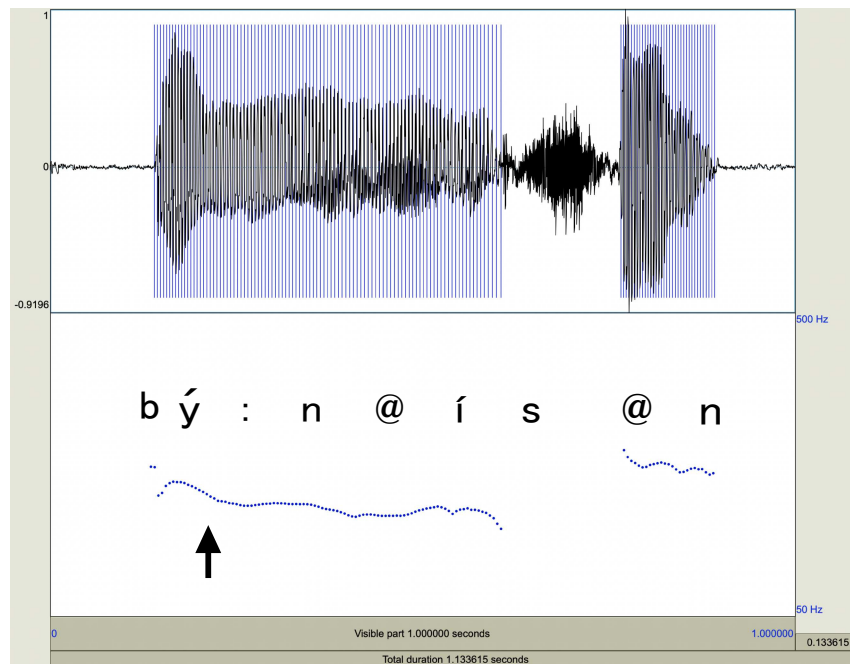


図 2: *begynnelsen* における軽微な下降調

なお、この軽微な下降調の出現は既に先行研究において指摘されている現象である（例: Selmer 1920, Fintoft 1979, Haugen and Joos 1952）。また Kristoffersen (2000)も指摘する通り、個人内で一貫して観察される現象ではなく、話者間でも軽微な下降調の出現の有無や頻度には差異があり、筆者のインフォーマントでも Nordbø 氏の資料には（少なくとも当時の調査ノートを確認する限りにおいては）全く観察されなかった。

3.1.3 末尾音節に主強勢の現れる語（一音節語含む）

最後に末尾音節に主強勢の現れる語の音調を見ていく。なお、実際に観察される音調の点から、ここでは一音節語も含めている。まず、次頁の(7)の表を参照されたい（網掛けの箇所は構造的に語例が存在しない（例: 一音節語(ONE)でありながら第二音節(2nd.)に主強勢を持つ）箇所を指す；空白の箇所は末尾強勢の語ではないため考察の対象外である）。(7)の表の語例を精査した結果、末尾強勢の語の音調に関して次の二つの特徴を指摘することができる: (i) 主強勢を担う音節に先行する音節には、その数を問わず、中平調(M)が現れる；主強勢を担う音節には上昇調(R)が現れることが多いが、例えば *frukt* 「果物」や *trøtt* 「疲れた」のように「短母音+阻害音」という構造を有する場合は、高平調の現れる傾向が強い。

また、(5)の表中の *glad* や次頁の(8)に示す語例のように、主強勢を担う音節が長母音を含む場合や短母音に共鳴音(sonorant)が後続する場合は、下降調や上げ幅の大きい上昇調も現れうる:

(7) 末尾音節に主強勢の置かれる語の音調

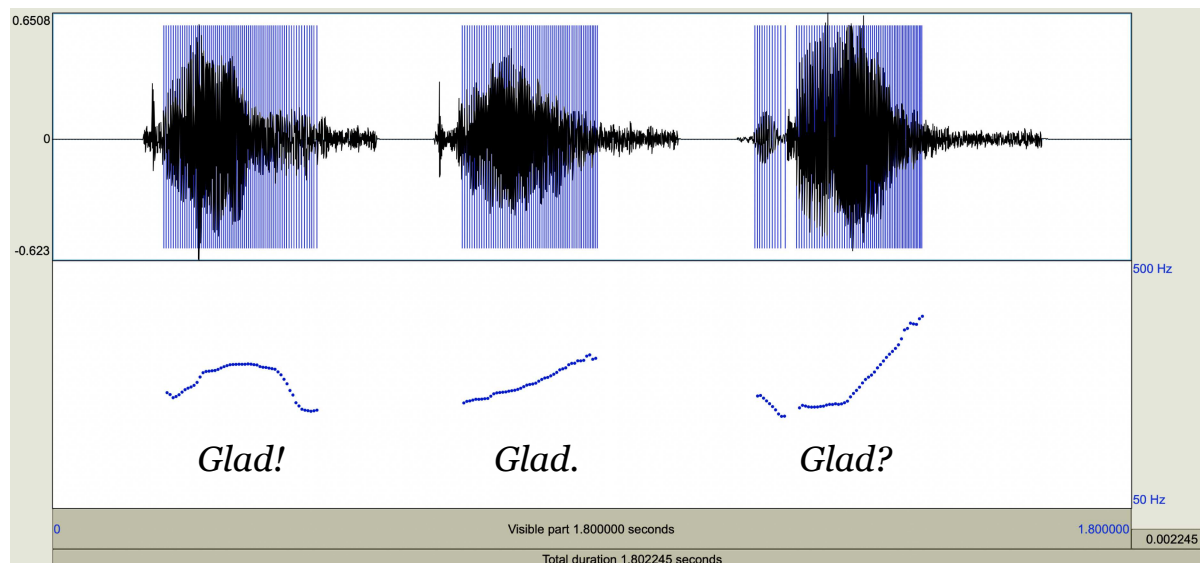
	ONE	TWO	THREE	FOUR	FIVE . . .
1st.	<i>glad</i> [g á:] R~F 「嬉しい」				
2nd.		<i>bensin</i> [ben.sí:n] MR 「ガソリン」			
3rd.			<i>medisin</i> [me.di.sí:n] MMR 「薬」		
4th.				<i>epidemi</i> [e.pi.de.mí:] MMMMR 「疫病」	
5th. :					<i>universitet</i> [u.ni.væ.ʃi.t ^h é:t] MMMMMR 「大学」

- (8) a. (i) *fugl* [fú:] R~F 「鳥」
 (ii) *god* [gú:] R~F(sic) 「良い」
 b. (i) *hund* [hún(n)] R~F 「犬」
 (ii) *varm* [várm] R~F 「熱い、暖かい」

併せて次頁の図3の *glad* のピッチ曲線も参照されたい(図3は、形容詞 *glad* を一語文として用い様々な文脈や意味合いで発したものである; 左からそれぞれ、強い断定・言い切り、中立的な平叙文、問い返しの意味合いの強い疑問文)。

以上、主強勢を担う音節に現れる(ないし現れ得る)音調の型の点から大まかに三つに場合分けし、個々の音調型の精査を行った。ノルウェー語南東部方言の音調の特徴は(9)のようにまとめることができる:

- (9) a. 主強勢を担う音節に現れる音調は次の三通りの場合がある:
 (i) 語末音節が主強勢を担う場合: 上昇調が現れる; 但し、下降調や上げ幅の大きな上昇調も現れ得る; 音節末子音が阻害音の場合は高平調が現れやすい。
 (ii) 語末以外の音節が主強勢を担う場合:
 A. 下降調; 但し、音節末子音が阻害音の場合は高平調が現れやすい。
 B. 低平調; 但し、軽微な下降調も任意で現れ得る。

図 3: *glad* の音調の変異型

- b. 主強勢を担う音節に先行する音節には、その数を問わず、中平調が現れる。
- c. 主強勢を担う音節に後続する音節（但し、語末音節は除く）には、その数を問わず、低平調が現れる。
- d. 主強勢の置かれていない語末音節には高平調あるいは上昇調が現れる。

4 先行研究と問題の所在

4.1 ノルウェー語南東部方言のこれまでの解釈と問題点

本節では、前節の(9)に要約した音調の諸特徴を先行研究がどう扱ってきたか概観し、個々の先行研究が抱える理論的な問題点や論証の不備を指摘する。そして、ノルウェー語南東部方言の音調の解釈における問題点を明確にし、後に筆者が提案する解釈の布石とする。

ノルウェー語標準方言（本稿が扱う南東部方言もアクセント音調の点ではこれに準ずる）の音調にまつわる学術的な論究は歴史も古く、文字通り、無数に存在すると言っても過言ではない。しかしそれらは、微細な点では差異があるものの、理論的な立場や解釈の方向性の点から、次の三つの仮説にまとめることができると筆者は考える: i) 語（あるいは主強勢を担う音節）に実際に観察される音調の型のそれぞれを音韻論的に有意義な音調（tone）として位置付ける立場（以降、声調言語(tone languages)の研究に倣い、この立場を「toneme（調素）仮説」と呼ぶことにする）; ii) 語（あるいは主強勢を担う音節）に実際に観察される音調を同一の型の音調(HL)が実現したものと仮定し、具体的な実現形の差異は主強勢に対する音調の位置（timing）の違いであると捉える立場（Kristoffersen (2006)に倣い「timing 仮説」と呼ぶ）; iii) timing 仮説が提唱する HL 音調をさらに抽象化し L のみと捉え、主強勢に対する音調のタイミングの差異ではなく、L 音調の有無が音韻論的に有意義であると解釈する立場

(Kristoffersen (2006)に倣い「privativity 仮説」と呼ぶ)。以下、三つの仮説それぞれについて批判的に検証していく。

4.1.1 Toneme 仮説とその問題点

Toneme 仮説とは、主強勢を担う音節に現れる音調、あるいは立場によっては主強勢を担う音節に先行・後続する音節の音調も含めた語全体に被さる音調一つ一つを、いわゆる声調言語における声調と同様に（あるいは日本語方言アクセント研究における「N型アクセント（上野 1984）」や「語声調（早田 1977）」になぞらえた方が適切か）、音韻論的に有限個の定まった型として捉えるものである。この解釈に拠れば、伝統的に Acc1 と呼ばれている音調は「LH」や「Level-Rise」等々といった型の音調が、また伝統的に Acc2 と呼ばれている音調は「FH」や「HLH」、「Fall-Rise」等々といった型の音調が語に被さっている（音韻理論風に還元すれば、基底レベルで指定(specify)されている）という解釈となる。個々の主張の詳細は若干異なるものの、大まかな解釈の方向性として toneme 仮説に沿う研究としては、Borgström (1938)や Fintoft (1970)、Rischel (1960)などが代表的である。

従来の toneme 仮説では、筆者が(9a.i)として示したような末尾強勢の語に観察される音調に関して明確な議論を避けてきたか、あるいは暗黙のうちに Acc1 として解釈してきたが、Vanvik (1961)は末尾強勢の音調をいわば「第三の音調」として個別の音韻論的な位置付けを与えた（川上 (1973b)も参照されたい）。

Toneme 仮説は、実際に観察される音調の具体的な型をそのまま音韻論的な解釈に取り入れたものであり、その意味では、例えば、ノルド諸語・諸方言に見られるピッチアクセントの言語間・方言間の差異を比較対象と言った類型論的な目的のもとでは利便性が高い。しかしながら、音韻論的な分析・解釈としてはあまりにも具体性が高すぎるため、南東部方言におけるアクセントや音調の本質を捉えきれてはいない。特に toneme 仮説において問題となる点は、任意で現れ得る音調の変異型を説明することができないということである。既に(9)において要約した通り、主強勢を担う音節に低平調の現れる場合には、任意で軽微な下降調も現れ得る。また、末尾音節に主強勢の現れる場合は、主として上昇調が現れる一方で、下げ幅の大きい下降調も現れ得る。Toneme 仮説ではこのような変異型の生起を説明することができない。Toneme 仮説のように主強勢を担う音節や語に被さる音調を音韻論的に決まった型として固定的に、あるいは静的に捉えてしまえば、そもそも変異型のような音韻論的に定まった型以外の音調が出現することを許容することができないのである。

この他にも、toneme 仮説が考察の対象とする資料が、一音節語ないし第一音節に主強勢の置かれる二音節語にほぼ限定されており、アクセントや音調にまつわる現象の実態を十分に捉え切ることができていない（この点は、他の二つの仮説にも該当する問題点である）。

4.1.2 Timing 仮説とその問題点

前節で検討した toneme 仮説が唱える通り、南東部方言の音調の概形は、伝統的に Acc1 と呼ばれるものは「LH」として、また伝統的に Acc2 と呼ばれるものは「HLH」としてそれぞ

れ捉えることができる。Timing 仮説では、LH と HLH をそれぞれ基底レベルでは HL 音調として捉え、表層（具体音声）のレベルでは、主強勢に対する時間的な位置（タイミング）のズレが実現したものとして考える。Acc1 では主強勢に対して HL 音調の H が先行するため（*HL; *は主強勢を表す）主強勢を担う音節自体の音調は L となるのに対し、Acc2 では主強勢に対してほぼ同じタイミングで H が現れる（H*L）ため主強勢を担う音節自体には HL、換言すれば下降調(F)が現れる、という解釈となる。

Timing 仮説はいわゆる自律分節音韻論/理論(autosegmental phonology/theory)の枠組みに基づく分析であり、1960 年台半ばから 70 年代以降のノルウェー語アクセント研究の多くが同様の理論的枠組みに依拠している（例: Lorentz 1981, Kristoffersen 1993）。理論的基盤は異なるものの、主強勢（を担う音節）に対するタイミングの違いという観点は、Haugen and Joos (1952) など構造主義音韻論が主流の時代の研究にも既に伺うことができ、このような卓見を自律分節理論は自身の理論的枠組みに取り入れたものと思われる（微細な論の展開は異なるものの、拙論(2005)も同じ方向性を取る）。

アクセント音調の抽象化を行うことでアクセントの本質に迫ろうと試みる点は timing 仮説の評価すべき点である。しかし、アクセント音調を HL 音調という固定的な型に還元するという解釈では、toneme 仮説と同様、音調の変異型を十分に説明することは未だにできない。また、toneme 仮説と同様、主強勢が第一音節に置かれる語に考察の対象がほぼ限定されており、そのため、timing 仮説では主強勢を担う音節に先行・後続する音節の音調や末尾音節の上昇調を音韻論的にどのように位置付けているのか不明である。さらに、(9a.i)に要約した音調、あるいは Vanvik (1961)が「第三の音調(Acc3)」として位置付けた音調をどう扱うのか、timing 仮説では（少なくとも明示的には）論究がなされておらず、この点においてもノルウェー語南東部方言のアクセントや音調の全体像を捉えきれてはいない。

また、主強勢に対する HL 音調の時間的な位置の違いが音韻論的に重要であるならば、自ずと音節の長さやタイミングを測る単位としてモーラが必要となるが、そもそも筆者は南東部方言にモーラは不要な単位であると考えており¹¹、アクセントを記述する上でもその有用性は著しく小さい。後述する通り、アクセント対立を音調の「位置」の違いでなく「有無」に還元すれば、そもそもモーラを設定する必要はなくなり、アクセントの記述全体が経済的かつ簡潔なものとなる。

4.1.3 Privativity 仮説とその問題点

‘Privativity’とは、例えば音韻論の分野では、ある音声特徴や弁別特性を欠いている状態を

¹¹ そもそも筆者は、上野 (2001) に倣い、音節は音声言語にとって不可欠な単位であるのに対し、モーラは「持つ」言語と「持たない」言語があり、当該言語の音韻論を記述する上で必要であれば設定する、という立場をとる（例: 三村 2008）。既に前掲拙論において公にしたデンマーク語のモーラや三村 (2013) において示した Sandnes 方言のモーラに関する議論と同様に、南東部方言に関してモーラは不要であると考えている。詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、筆者の主張を要約すると次の通り：音節構造の「最大性制約 maximality constraint」や「最小性制約 minimality constraint」など、モーラ概念を用いることで優れた説明が可能となると考えられる現象（窪菌 2002）が、モーラを用いずとも音節概念のみで説明が可能であり、また、モーラを用いることにより制約自体が成立しなくなるという自己矛盾の危険がある。

指す用語であり、privativity 仮説は、その名の通り、あるアクセント音調に指定される音調が他のアクセント音調では欠如している、という解釈をとる。このような、いわゆる欠如的対立に至る前段階として、privativity 仮説では、timing 仮説が抽出した HL 音調をさらに抽象化する。まず、(privativity 仮説が考察の対象とする第一音節に主強勢の置かれる語では) HL 音調の H は Acc1 では実際には現れず不要である点から、Acc1 の音調から H を取り去る。また、Acc2 の HL 音調の L が Acc1 の残された音調 L と共通するために取り去る。結果として、音韻論的には Acc2 に H のみを指定し、Acc1 には音調が無指定（欠如）であると解釈する。

Privativity 仮説の代表的な研究としては Kristoffersen (2006)が挙げられるが、仮説の基礎となる本質的な着想は既に Haugen (1967)に見ることができる。後ほど詳述するが、論拠は異なるものの、筆者も同じく Acc1 の音調を音韻論的には「無指定」（あるいは「欠如」）と捉えるため、この点は高く評価することができるものの、privativity 仮説には未だ理論的な問題点が残される。そもそも、Acc1 の音調が音韻論的に無指定であると解釈するならば、実際に Acc1 の語の主強勢を担う音節に現れる低平調や軽微な下降調をどう説明するのか明らかではない。同系統の言語であるスウェーデン語の Stockholm 方言にも Acc1 と Acc2 の二つのピッチアクセントがあり、現代の主流としては Acc1 の音調は無指定であり、表層に現れている音調は「イントネーション」が実現したものと解釈するようである (Elert 1970, Gårding 1974, Tomas Riad: 私信, 2010 年 12 月)。同様の解釈はノルウェー語南東部方言の Acc1 にも適用可能であるが (Kristoffersen 1993)、そのためには「イントネーション」の概念をもっと厳密に規定しなくてはならず、未だ理論的な問題が残る。また、他の二つの仮説と同様、privativity 仮説も第一音節に主強勢の置かれる二音節語に考察の対象がほぼ限定されており、従って、主強勢を担う音節に先行・後続する音節の音調や、末尾音節に現れる上昇調をどのように解釈するのか全くもって不明である。さらに、他の二つの仮説と同様、末尾音節に主強勢の置かれる語の音調を音韻論的にどう位置づけるのかに関しても、privativity 仮説では不明である。

4.2 解決すべき課題

以上、先行研究を批判的に検討することで、ノルウェー語南東部方言のアクセントの音韻解釈における問題点を明らかとした。解決すべき問題点を要約すると下記の通り：

- (10) a. 音韻論的に指定する音調の型は何か、またその数はいくつか。
 - (i) Acc1 と Acc2 の両方に音調を指定するのか、あるいは一方のみか。
 - (ii) 指定する音調はどのようなものか。
- b. 末尾音節に主強勢の置かれる語の音調
 - (i) 音韻論的に指定すべきか。
 - (ii) 指定するならば、Acc1 と Acc2 のいずれのか、あるいは「第三の音調」か。
- c. 主強勢を担う音節に先行・後続する音節の音調の位置付け
 - (i) 音韻論的に指定は必要か。
 - (ii) 不要であるとすればその位置付けは何か。

- d. 音調の変異型をどう説明するか。
- (i) 音韻論的な位置付けはいかなるものか。
 - (ii) その生起条件は何か。

次節では、以上の問題点を解決すべく、筆者の提唱するアクセント論的観点からノルウェー語南東部方言の音調の最適な解釈案を提示する。

5 アクセント論的解釈: 非関与的な音調の分離とアクセントの抽出

5.1 非関与的な音調 (広義のイントネーション) の分離

ノルウェー語南東部方言のアクセントにおける音韻論的に真に有意義な特徴を明らかとすべく、まず、実際に観察される音調から音韻論的に有意義ではない音調を分離することから始める。

既に述べた通り、(3)と(5)に示した表は、それぞれ主強勢を担う音節に下降調の現れる語と(主として)低平調の現れる語を、長さ(音節数; 横の列)と主強勢の位置(左から数えて何番目の音節か; 縦の列)の点から整理したものである。(3)と(5)の資料から、ノルウェー語南東部方言のアクセント音調に関して次の三点を指摘することができる:

- (11) a. 主強勢を担う音節に先行する音節は全て中平調(M)を伴っている。この音調は、例えば(3)の *marmeLAde* と(5)の *persoNAle* の対比から読み取ることができる通り、音節数の等しい語の音調の型を相互に区別する上では有意義ではない。
- b. 主強勢を担う音節に後続する音節は、末尾音節を除いて全て低平調(L)が現れている。この音調は、例えば(3)*PEkefinger* の(5)*VERdensrommet* の対比から読み取ることができる通り、長さの等しい語の音調の型を相互に区別する上では全く役割を果たしてはいない。
- c. 末尾音節には常に高平調(H; あるいは任意で上昇調も)が現れているが、この音調も、例えば(3)の *HAke* と(5)の *SKULder* 対比から明らか通り、同じ長さの語の音調の型を相互に区別する上では有意義とは言えない。

以上から、語のアクセント音調を形成する音調の内、主強勢を担う音節に現れる音調である下降調と低平調を除く全ての音調は、語における主強勢の位置が決まり次第、それに応じて自動的に導くことができる。つまり、主強勢を担う音節に先行・後続する音節に被さる音調は全て、アクセント対立には関与しない音調として語全体の音調から分離することが可能であり、かつ、アクセントの真に弁別的な特徴を抽出する上で必須であると結論づけることができる。

また、筆者が主張するようにアクセント対立に関与しない音調を音韻論的な記述から除外(音韻理論風に言えば基底レベルにおいて指定しない)することで、例えば Lorentz (1984) のように弱音節の音調を語彙レベルで逐一指定するという無用な作業を回避することが可能となる。

5.2 アクセント音調の弁別的特徴の抽出

前節での議論の結果、ノルウェー語南東部方言では、主強勢を担う音節の前後に現れる音調はアクセント対立においては全く役割を果たしておらず、主強勢を担う音節に現れる音調の型のみが、同一の長さの語に被さる音調の型を相互に区別する上で重要であることが明らかとなった。では、音韻論的には下降調と低平調をそれぞれ語彙的に指定すればアクセント記述として必要かつ十分かというところではない。というのも、任意で低平調に替わり現れ得る軽微な下降調の存在を説明することができないからである。語彙レベルで音韻論的に低平調が指定されている以上、その他の型の音調の出現は許容されないにも拘らず、実際には軽微な音調の下降も起こり得ることが説明できないのである。

そこで筆者は、南西部方言である Sandnes 方言のアクセントを記述した拙論（三村 2013, 2014）に倣い、語彙レベルで音韻論的に指定する音調は下降調のみであり（伝統的に Acc2 と呼ばれる音調）、具体音声として低平調が現れる語の音調（伝統的に Acc1 と呼ばれる音調）は語彙レベルでは指定されていない、という解釈を提案する。基底のレベルでは音調は無指定であるが、いわゆる「広義のイントネーション」（詳細は第 5.4 節を参照）が表層にあらわれたものが Acc1 の音調である、という解釈である。

このように解釈することで、低平調に替わり任意で現れ得る軽微な下降調の存在を許容し得るという点で先行研究より説明力が高ただけでなく（軽微な下降調の出現理由については第 5.4 節を参照）、同系統の諸言語・諸方言との通時的な対応関係と有標性(markedness)の対応関係を適切に把握することが可能となる。例えば、既に度々触れてきたように、ノルウェー語南西部方言の一つである Sandnes 方言の Acc1 も、またスウェーデン語の Stockholm 方言の Acc1 も(Elert 1970, Gårding 1974)音韻論的には音調が無指定と解釈されるが、通時的に対応すると考えられる南東部方言の Acc1 も無指定と解釈することにより、いずれの言語・方言における Acc1 も同じく無標(unmarked)な現象として捉えることが可能となる¹²。

5.3 末尾強勢の語の音調の位置付け

ここまでの考察を通じて、伝統的に Acc2 と呼ばれる音調においては 主強勢を担う音節に下降調が語彙的に指定されており、一方、伝統的に Acc1 と呼ばれる音調では語彙レベルでは音調の指定がなされていないことが明らかとなったが、(9a.i)に要約した音調、つまりは主強勢を担う末尾音節に被さる音調を Acc2 と捉えるのか Acc1 と捉えるのか、はたまた第三の類を設定するのかといった問題点が未だに残る。

既に触れた通り、Acc3 を仮定する Vanvik (1961)を除き、ほぼ全ての先行研究が主強勢を担う末尾音節の音調に関して論究してこなかったか、あるいは十分な論証を経ることなく暗黙のうちに Acc1 と見なしてきた。結論を先取りすれば、筆者もほとんどの先行研究と同様に

¹² 第 1.4.節にて触れた通り、ノルウェー語やスウェーデン語の Acc1 と通時的に対応するデンマーク語の stød は声門化の存在が音韻論的に有意義であるが、この点で、ノルウェー語などの Acc1 と有標性の対応関係が成立しない。詳細な議論は稿を改めざるを得ないが、拙論 (2021)にて触れた通り、これはノルウェー語などの Acc1 の解釈に問題があるのではなく、stød 自体の有標性の概念の問題であると思われる。Basbøll (2008)が唱えるように、stød の有無とそれにまつわる有標性の概念を規定し直す必要がある。

末尾強勢の語の音調を Acc1 と解釈するが、ここではその論拠を明らかとしたい。

主たる論拠としては二つある。第一に、(8)に示した通り、主強勢を担う末尾音節には上昇調の他にも下降調や上げ幅の大きな上昇調も現れるが、主強勢の置かれた末尾音節に音韻論的に音調が指定されていないと仮定すれば、このように様々な音調が現れる事実を説明することが可能となる(個々の音調がなぜ現れるのかは後述)。ある決まった型の音調を語彙レベルで指定しまえば、種々の型の音調の出現が許されないからである。

第二の論拠として形態音韻論的な音調の振る舞いが Acc1 の語と並行的であることが挙げられる。例えば英語における「定冠詞+名詞」に相当する形式は、(デンマーク語標準方言と同様に)ノルウェー語南東部方言では「定性 definiteness」を表す接尾辞を名詞に付加して作られるが(この語形をノルウェー語文法では「既知形」や「定形」と呼ぶ)、末尾強勢(oxytone)の語に接辞を付加して作った語形の音調は、ちょうど第一音節に主強勢の置かれる Acc1 の語と同じく、主強勢を担う音節に低平調が現れる「L(L...)H」という型の音調を全体として有する。具体例を(12)に示す:

(12) 単数・既知形 (sg.def.) と複数・既知形 (pl.def.) の音調

- a. *garn* [gá:ŋ R~F] 「網」
 – *garn-et* [gá:ŋə LH] (sg.def.)
 – *garn-ene* [gá:ŋə.nə LLH] (pl.def.)
- b. *universitet* [u.ni.væ.fi.t^hé:t MMMMR] 「大学」
 – *universitet-et* [u.ni.væ.fi.t^hé:tə MMMMLH] (sg.def.)
 – *universitet-ene* [u.ni.væ.fi.t^hé:tə.nə MMMMLLH] (pl.def.)

(12a)の *garn* には上昇調(R)や下降調(F)が現れうるのに対し、既知形接辞-*et* や-*ene* の付加された *garnet* や *garnene* では主強勢を担う音節 *gar-*の音調が常に低平調(L)である点に注意されたい。

また、単数既知形の音調型も末尾強勢の語のアクセントを解明する論拠となる。(13)は末尾音節以外の音節に主強勢の置かれる語とその単数既知形の音調の具体例である:

- (13) a. *finger-en* [fíŋ.ŋə.rən LLH] (~[fíŋ.ŋəŋ LH]) 「指 sg.def.」
 (< *finger* [fíŋ.ŋəŋ LH] 「指 sg.indef.」)
- b. *ansikt-et* [án.sik.tə FLH] 「顔 sg.def.」
 (< *ansikt* [án.sikt FH] 「顔 sg.indef.」)

例えば (13a) の *fingeren* は *finger* の単数既知形だが、単数既知形の主強勢を担う音節に名詞本来の音調と同様、低平調(L)が現れており、単数既知形を作る接辞は語幹のアクセントには影響を与えない(アクセントを保存する)ことが読み取れる。このことは末尾強勢の語のアクセントが単数既知形に保存されていることを示している。先述の通り、末尾強勢の語である *garn* や *universitet* の単数既知形は Acc1 の語と同じ型の音調を有していたが、このことから *garn* など末尾音節に主強勢の置かれる語のアクセントは Acc1 であると結論づけることができる。この解釈をとることで、Vanvik (1961)の唱えるような「第三の音調」を設定する必要はなく、音韻論的に経済性の高い記述を実現することが可能となる。

ここまで論じてきた筆者のアクセント解釈を要約すると下記の通り:

(14) a. Acc1 の解釈に関して:

- (i) 語彙レベルで音韻論的に音調は指定しない。
- (ii) 末尾音節に主強勢が置かれる語のアクセントも Acc1 である。
- (iii) 具体音声のレベルで主強勢を担う音節に現れる低平調や軽微な下降調、また主強勢が末尾音節に置かれる場合に現れる上昇調や下降調は、全て「広義のイントネーション」により主強勢が音声的に実現したものである。

b. Acc2 の解釈に関して:

主強勢を担う音節内部における音調の下降は当該音節に語彙レベルで与えられた下降調が実現したものである。

c. アクセントの弁別的特徴:

下降調の位置の違いではなく「有無」がアクセント対立において弁別的である。

5.4 広義のイントネーションの位置づけ: 「リズム単位」と「単位音調」の提唱

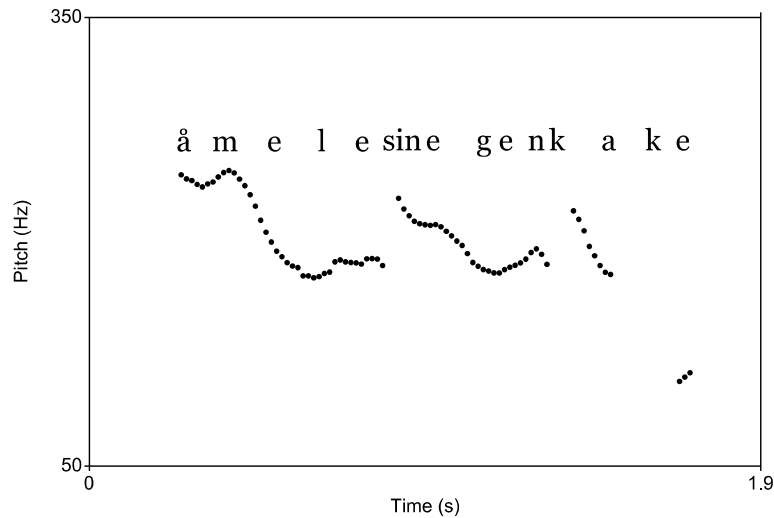
これまで(3)や(5)、(7)の語例を通じて示してきた Acc1 と Acc2 の具体音声レベルでの音調型を要約すると下記のように表すことができる (#は語境界を、fは「軽微な下降調」示す):

$$(15) \quad \#(M \dots M) \left\{ \begin{array}{l} \text{Acc1: } L (\sim f/R/F) \\ \text{Acc2: } \quad \quad F \end{array} \right\} (L \dots L)(H \sim R \sim F) \#$$

つまり、主強勢を担う音節には、Acc1 では主として低平調(L)が現れ、任意で軽微な下降調(f)や上昇調(R)、下降調(F)が変異型として、また Acc2 では常に下降調が現れ、主強勢を担う音節に先行並びに後続する音節(但し末尾音節は除く)にはそれぞれ中平調(M)と低平調(L)が、そして末尾音節には任意で高平調(H)あるいは上昇調が現れる。

これまで、主強勢を担う音節を除く全ての音節に現れる音調を「広義のイントネーション」として扱い、アクセント対立においては有意義ではないと言う理由から語彙レベルでは指定する必要がなく、従ってアクセント抽出の過程において取り去ってきた。既に触れたように、一部の先行研究でも同じく、表層レベルでの Acc1 の音調を「イントネーション」として処理してきたものの、その音韻論的な位置づけに関しては明らかにはしていない。改めて、筆者が「広義のイントネーション」として扱ってきた音調の理論的な位置づけを行わなくては説明のできない問題点が未だ残されているからである。

例えば、具体音声のレベルでは Acc1 の語の主強勢を担う音節の音調は低平調であるが、一般的に強勢の置かれた音節には基本周波数は上昇に伴う卓立(pitch prominence)が現れることが指摘されており(Bolinger 1958, Hyman 1975: 209, Lehiste 1970: 128)、この点で、Acc1 の語の主強勢を担う音節に現れる低平調は音声学的に見て不自然であり、従って低平調の出現を何らかの形で説明しなくてはならない。また、Acc1 と Acc2 の別を問わず、主強勢を担う音節に先行する音節には常に中平調が現れるが、音声学的な必然性を説明することは困難である。さらに、強勢を担わない末尾音節には高平調や上昇調など高めの音調が現れるが、こち

図 4: *å mele sine egen kake* のピッチ曲線

らも音声学的には容易に説明できそうにない。

このような音声学的に不自然と思われる音調は、**語彙レベルでの指定が不要であるという意味では確かに「イントネーション」として位置付けてよいものではあるが**、その一方で、南東部方言の語のアクセント音調は(15)に要約したような**一定の型を常に示しており、単なるイントネーションとはその性質や本質が異なる**。そこで筆者は、句や文の音調に着目することで「広義のイントネーション」の本質を捉えたい。(16)並びに図 4 のピッチ曲線を参照されたい（正書法の大文字と太字の音調表記はそれぞれ文や句のリズムの拍を表す）：

- (16) *å* **ME***le* *sin* *E***gen** *KA***ke**
to INF. flour v. one's own cake
[ɔ̃ M mé:ɹ.ə **FL** sin H é:ɹ.gən **FH** k^hú: kə **FH**]

「私利を図る」

(16)の動詞句を見ると、リズムの拍（強勢）を三つの音節 *ME-*, *E-*, *KA-*が担っていることがわかる。また、*å MEle sin* 全体で、ちょうど第二音節に主強勢の置かれた **Acc2** の語と同じ音調を有している点にも注意されたい。リズムの拍を担うこれらの音節が、それぞれ前後に現れる弱音節を付き従わせる形で「リズム上のまとまり」を成しており、例えば先述の *å MEle sin* はこれ自体が全体として「まとまり」を成していると筆者は考える。同様に、*Egen* と *KAke* もそれぞれ一語ではあるがリズム上のまとまりを成していると考えられる。

このような筆者の考える「まとまり」は、Kristoffersen (2000: 275)が **Bokmål**（南東部方言を基盤とする標準方言）のリズムの分析において‘Accent Phrase’と名付けた単位や、Abercrombie (1976)がイントネーションやリズムの分析において‘foot’と呼んだ単位、あるいは Grønnum (2007: 82)がデンマーク語標準方言のイントネーションを記述する際に

‘trykgruppe’ (英語に直訳すれば stress group) と呼んだ単位にほぼ相当するもので、筆者は「リズム単位 rhythm unit」と呼ぶことにしたい。

南東部方言の「リズム単位」を形式的に要約すると以下のようなになる(σは音節を、||はリズム単位の境界を表す)：

(17) 「リズム単位」の構造

... || (σ... σ)ó (σ... σ) || ó...

つまり、先行する弱音節があればそれも含めて、強勢を担う音節から次の強勢を担う音節の直前の弱音節までが、筆者の唱える「リズム単位」である。(16)の動詞句で例示すれば、*å Mele sin, Egen, Kake* のそれぞれが独立したリズム単位を形成していると考えられる。

ここで注意すべき点は、いずれのリズム単位も(15)に要約した音調を伴っていると言う点である。それぞれのリズム単位に被さる音調は、言うなればリズム単位の結束や境界を韻律的に明示する機能を果たしていると考えられることができる。このような音調を筆者は、リズム単位に被さる音調という意味で「単位音調 unit tone」と呼ぶことにする。

以上の議論をまとめると、これまで筆者が「広義のイントネーション」として処理してきた音調は、全て「単位音調」として理論的に位置付けることが可能となる。南東部方言の単位音調を形式的に表示すると次の通り：

(18) ノルウェー語南東部方言の単位音調

|| (M... M) \acute{L} (L... L)(H~R~F) ||

つまり単位音調は、やや高く平らに始まり主強勢の位置から低く平らに続き、リズム単位の末尾では任意で高平調や上昇調、下降調の現れる音調、とすることができる。

ここで、単位音調を踏まえた上で、南東部方言において実際に観察されるアクセント音調の実現形について詳述する。まず最初に、リズム単位の末尾に現れる高平調や上昇調はいわゆる「狭義のイントネーション」として位置付けられるものであり、リズム単位の末尾が文末に合致した場合に具体音声のレベルで表出するものである。同様に、末尾強勢の語の主強勢を担う音節に現れる上昇調や下降調も狭義のイントネーションが具体音声のレベルで実現したものと考えられる。末尾強勢の語は先述の通り Acc1 の語と見なすことが可能であり、従って、主強勢を担う末尾音節は音調が指定されない言わば「空っぽ」であるため、そこに狭義のイントネーションの種々の音調が現れたものと考えられることができる。

なお、Acc1 の語の主強勢を担う音節には、低平調の他、変異型として軽微な下降調も現れていたが、これも単位音調によるものであると筆者は考える。先述の通り、単位音調は主強勢を担う音節の直前で音調の下降を要求する。しかし、中平調から低平調へ(あたかも離散的に)一気に音程を下げることは生理的には困難であり、実際のところは漸次的に音程を下げざるを得ず、単位音調が要求する低平調へ到達するまでに幾分か時間を要する。主強勢を担う音節の音素配列によっては、例えば長母音からなる場合や単母音に共鳴音が後続する構造の場合は声帯の(波上開閉)運動が阻害されにくく、低平調への下降に時間を要することを許容しやすい条件であるため、本来ならば主強勢を担う音節の直前で完了するはずの音調の下降が主強勢を担う音節内部にまでずれ込むのである。この下降の若干の遅れが、具体

音声のレベルでは軽微な下降調として実現したものであると筆者は解釈する。

Acc1 のアクセント音調が単位音調の実現であるのに対して、Acc2 の場合は、語の主強勢を担う音節に現れる下降調はアクセントとして語レベルで音韻論的に指定されている音調であるため、語（正確にはリズム単位）に被さる単位音調の要請で低平調の出現が期待されるものの、それに優先して下降調の方が具体音声として現れている。

最後に、「リズム単位」並びに「単位音調」という用語について若干の補足を行いたい。既に南西部方言のアクセントを扱った拙論（三村 2014）において触れたが、用語やそれが表す概念は、川上（1961）や上野（2003）において唱えられている「アクセント句」や「句音調」にそもそもの着想を得てはいるものの、厳密には指すものが異なるために不必要な混乱を招くきらいがあるため、敢えて「リズム」や「単位」という用語を用いた。特に筆者の提唱する「リズム単位」は、いわゆる形態統語論的な意味での語よりも大きな、句や文に相当する場合もあるが、第2節にて先述した通りアクセントはあくまでも語の属性と見なすため、句や文にも被さりうる単位音調やそれが被さる単位を指すために「アクセント」という用語を使用することは避けた。また、同様の理由から、筆者の唱える単位は形態統語論的な意味での大きさは不問であるため、日本語方言アクセント研究で用いられる「句」や Kristoffersen が用いる ‘phrase’ といった語は避けて「単位」という用語を採用した¹³。

5.5 音調の重層的構造

以上、ノルウェー語南東部方言において音韻論的に有意義ではない音調を「単位音調」という概念を用いて理論的に位置付けることが可能であることを論じてきた。その際に引用した(16)の資料はいわゆる形態統語論的な意味での句であったが、確かに句や文がリズム単位に相当することはあるものの、実際には一語でリズム単位を形成することもある。これまで(3)や(5)、(7)において示した「語」の資料に観察された M や H、R といった音調も実は単位音調の一部であり、語が単独でリズム単位を成したがために現れた音調に過ぎない。単位音調はあくまでもリズム単位の属性であり、語に固有の属性、つまりアクセントして真に弁別的な特徴は、主強勢を担う音節に語レベルで指定される下降調の有無のみなのである。

ここまでの議論をまとめると、これまでに考察してきた形態統語論的な意味での「語」が具体音声として有する音調型は、「語」に固有の音韻論的・韻律的な属性であるアクセント（下降調の有無）の上に、リズム単位の属性である単位音調が被さることで作られた重層的なものである、ということになる。南東部方言の音調の構造を抽象化並びに形式化してまとめると(19)のように表すことができよう（音韻表記中の右カギ括弧 /|/ は下降調を指す；また上付きの縦棒 /| は強勢を表す）：

$$(19) \left\{ \begin{array}{l} \text{Acc1 (e.g. } \textit{personale}) : / \sigma \sigma ' \sigma \sigma / \\ \text{Acc2 (e.g. } \textit{marmelade}) : / \sigma \sigma ' \sigma / \end{array} \right\} + \parallel (M \dots M) \acute{L} (L \dots L) (H/F/R) \parallel = \left\{ \begin{array}{l} [MMLH] \\ [MMFH] \end{array} \right\}$$

¹³ 日本語アクセント論における「アクセント句」という用語の意味とその他の研究領域における用語の誤用に関しては上野(2011: 322-323)を参照されたい。

現実の発話では、(19)の右端に示した出力形（表層形あるいは具体音声）に加えて、さらに発話の意図などの必要に応じてリズム単位の末尾（形態統語論的には語末や文末に相当）に上昇調や下降調といったいわゆる「狭義のイントネーション」が現れる。

なお、リズム単位の切れ目やまとまり方、あるいは単位音調の型は決して一定のものではなく、実際の発話の内容に依存して変動しうる流動的なものである点に留意が必要である。例えば(16)に示した句の資料は、取り立てて強調等の意図を含まないニュートラルなものとしてインフォーマントが発話したものである。一方、談話のレベルで強調等の特別な意図が加われば、いわゆるフォーカスの置き方を反映して、韻律的にはリズム単位の境界の位置や結束の仕方の違いが生じ、最終的には単位音調の型、つまりは全体的な発話のメロディーの違いとして表出される。このように、リズム単位や単位音調という概念は、統語論的な意味での文構造と対応する固定的なものではなく、文や句の内容に応じて柔軟に変動しうるものである点に注意されたい。

5.6 音調的ストレスアクセント

これまでのノルウェー語やスウェーデン語のアクセントに関する論究では、ストレスと Acc1/2 をそれぞれ個別で詳細に論じてはきたものの、これら二つを各言語ないし方言における音韻論の中でいかに位置付けるかに関してはそれほど議論をしてこなかった。既に南西部方言に関する拙論（三村 2014）において唱えたことではあるが、南東部方言に関しても同様に、筆者はストレスと（伝統的に Acc1/2 と呼ぶ）ピッチアクセントはそれぞれ独立して南東部方言の音韻論の中に位置づけられているとは考えておらず、むしろ一種の従属関係が存在し、その結果、南東部方言のアクセントとしてはストレス（強さ、強弱）が基盤をなすと考える。論拠として複合語の例を以下に示す：

- (20) a. *verdensmester* [væ̀r.dəns.məs.tə̀] LLLH 「世界チャンピオン」
(< *verden* [væ̀r.dən] LH 「世界」 + *mester* [məs.tə̀] LH 「チャンピオン」)
b. *verdeshjørne* [væ̀r.dəns.jø:ɲə] LLLH 「方角」
(< *verden* [væ̀r.dən] LH 「世界」 + *hjørne* [jø:ɲə] FH 「角」)

一見すると、(20a)の *verdensemester* の後部要素 *mester* は複合語を形成しても自身の音調を位保持しているように見えるが、(20b)の *verdeshjørne* では後部要素 *hjørne* が単純語として本来有している音調が現れず、結果として複合語内部では *mester* と *hjørne* の間の音調の対立は消失していることが窺える。これは（アクセントによる）音調が主強勢を担う音節においてのみ対立することを表しており、複合語後部要素のように主強勢を失う位置に立つと、語が本来有する音調は消失することを意味している。つまり、下降調の有無というアクセント音調の対立は主強勢の置かれた音節でのみ実現するという点で音調は強勢に従属しており、南東部方言の音韻論の中で対等の位置づけをもって併存してはいないと言える。

南東部方言のアクセントは、音調の「有無」と「向き」（つまりは下降調; 「向き」という用語は川上 (1973a)を参照) が音韻論的に有意義なストレスアクセントであり、日本語方言アクセント研究に倣えば、アクセント核（主強勢）が二種類（下降調の有無）あるストレスア

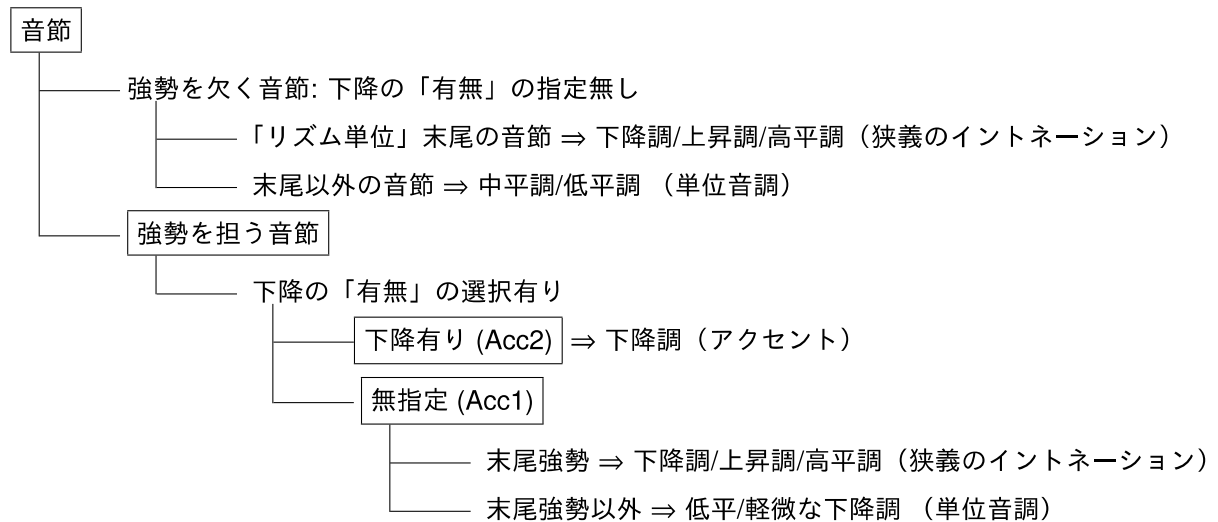


図 5: 南東部方言における強勢と音調の関係

クセントである、と結論づけることができる (図 5 も参照)。このように、音調等にもつわる特性を二次的に併せ持つストレスアクセントを、Hyman (1975: 230-231) に倣い (暫定的に¹⁴) 「音調的ストレスアクセント **tonal stress accent**」と呼ぶことにする。

6 結語

6.1 まとめ

以上、本稿では、ノルウェー語南東部方言において伝統的に Acc1/2 と呼ばれてきた音調を筆者の唱えるアクセント論的視点から捉え直し、拙論を含めた先行研究の問題点や論証の不備を解消することで、従来は個別的に扱われてきたストレスアクセントと音調を統一的に捉えることのできるアクセント体系の構築を試みた。本研究の要点をまとめると次の通り:

- (21) a. ノルウェー語南東部方言のアクセントは二種類の強勢 (下降調の指定無し・有り) をアクセント核とするストレスアクセントである。
- b. リズム上のまとまりである「リズム単位」と、その結束や境界を明示する「単位音調」を提唱。
- c. 主強勢を担う音節に先行・後続する弱音節に現れる音調は「リズム単位」の属性である「単位音調」が音声的に実現したもの。
- d. Acc1 の音調は「単位音調」や狭義のイントネーションが音声的に実現したものである; 語彙レベルでの音調の指定は不要 (他言語・他方言とのアクセント対応の説明が可能)。

¹⁴ 以前は「音楽的ストレスアクセント **musical stress accent**」と呼んでいたが (cf. 三村 2010)、「音楽的」という語からは必ずしも筆者の意図する音調や旋律だけが想起されず、音質や音色といったものも含まれる嫌いがあるため、敢えて「音楽的」という語の使用は避けた。

- e. 一音節語を含む末尾強勢の語は Acc1 の語に分類される。
- f. Acc1 の語に任意で観察される「軽微な下降調」は、主強勢を担う音節の直前に現れるはずの「単位音調」の「下げ」が遅れて実現したものである。
- g. Acc2 の下降調は語彙レベルで与えられたアクセントが実現したものである。

6.2 今後の課題

本稿では、ノルウェー語南東部方言の音調に関してアクセント論の視点から詳細な議論を行ってきたが、その一方で、アクセントの基盤を成すストレスに関しては十分な議論を行うことができなかった。ひとまず本稿では、主強勢の位置は語の特定の音節に限定されないものとして扱ってきたが、これはあくまでも南東部方言において実際に観察される強勢の型を列挙したに過ぎず、主強勢の分布を決定する音韻論的なメカニズムの有無やその本質については全く議論をしていない。従って、今後の課題としてはまず第一に、主強勢の分布が語（単純語）の音節数や音節構造、語種等々の情報から予測可能であるか否か、調査ならびに検討を進めていく必要がある¹⁵。

また、例えばデンマーク語のように、ノルウェー語と同系統でありながら、主強勢を担う音節の音調の向きが（少なくとも語レベルでは）音韻論的には有意義ではない言語において、筆者の提唱する単位音調の概念が有益か否か検証を行うことも、今後の課題である。既に拙論（三村 2021a: 30）にて触れたが、首都コペンハーゲンの方言や主にそれを基盤とする標準方言では、主強勢を担う音節は低く平らな音調の伴う傾向にあり、音声学的に見ていささか不自然である。十数年に渡る筆者のこれまでのデンマーク語の調査でインフォーマントを務めてくださった話者の発音と比較されたい（次頁の図 6 のピッチ曲線も参照のこと）：

(22) 地域共通語 (Odense¹⁶) とデンマーク語標準方言¹⁷の音調の対比

	地域共通語	標準方言
a. <i>februar</i> [féβu.à:] 「2月」	H(~R)ML	LHH
b. <i>hangar</i> [háŋ.gà:] 「格納庫」	H(~R)L	LH(F)
c. <i>linse</i> [lén.sə] 「レンズ」	H(~R)L	LH

(22)の語例は、いずれの語もいわゆる引用形 (citation form) として発話されたものであり、従って、フォーカス等々の特別な意図は込められてはいない。アルファベットで示した音調に

¹⁵ 学術的な論究ではないものの、ノルウェー語（おそらく Bokmål か）の（ピッチ、高さ）アクセントが、（日本語方言アクセント研究でいうところの）「二型アクセント」（上野 1984）や二つの型をもつ「語声調」（早田 1977）に準ずるものとして捉えられることがある（例えば、亀井孝ほか編著（1996）、『言語学大辞典 第6巻述語編』所収の「アクセント」の項(p. 7): 「語の長さにかかわらず2種類しかないという点では、【中略】語声調ないし二型アクセントと似た性質のものである」）。但し、このような解釈は、音調の対立の前提となる主強勢の位置が予測可能でなくては成り立たないものである。今後の研究の進展次第では、本稿での筆者のアクセント解釈も若干の修正を迫られるかもしれない。

¹⁶ インフォーマントは、言語形成期を Odense にて過ごした Evi Egholm 氏（1973 年生まれ・女性）。Egholm 氏に関する詳細は前掲拙論（三村 2021a）を参照されたい。調査時期は 2013 年 8 月。インフォーマントとして長年にわたり尽力して下さっている Egholm 氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

¹⁷ デンマーク語辞典 *Den Danske Ordbog* のインターネット版より音声資料を採取。吹き込みは 40 代（当時）女性のデンマーク語標準語（デンマーク東部（コペンハーゲンか？）の方言）の話者である Anna Christine Lóf 氏による（典拠: <https://ordnet.dk/ddo/artiklernes-opbygning/udtale>）。

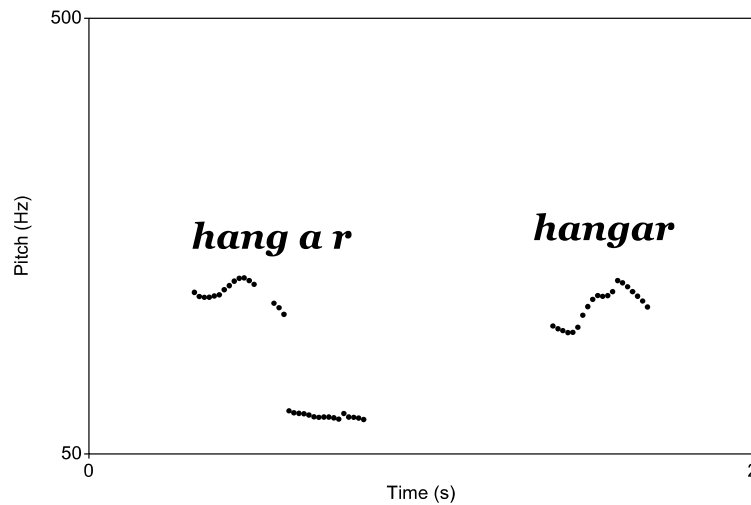


図 6: (22b) *hangar* のピッチ曲線 (左: 筆者の話者、右: 標準方言の話者; 三村 (2021a: 30))

注目されたい (主強勢を担う音節の音調を太字で示す)。地域共通語の方は、変異型で上昇調が現れはするものの、押し並べて高い音調を伴っており、また後続音節にかけて漸次的に音調が下降を示し、全体的に音声学的に見て自然な基本周波数の遷移を示すと言える。一方、標準方言の方は、主強勢を担う音節の音調が低平調を伴い、後続音節は主として高く現れるという、音声学的に見ていささか不自然な動きの音調を全体的に有することがわかる。

従来、デンマーク語音声研究の領域では、このような音調は「イントネーション」という用語のもとで扱われているが (例: Grønnum 1992)、ノルウェー語南東部方言と同様、「イントネーション」という用語の厳密な規定やデンマーク語音韻論における位置づけは十分になされてはおらず、なぜ一方で音声学的に自然な「イントネーション」を持つ方言もあれば、他方で音声学的に不自然な「イントネーション」を有する方言もあるのか、十分な論究もなされていない。この問題を筆者の提唱する単位音調を用いて解決可能か否か、単位音調の概念の応用範囲に関して、今後、更なる考察を進め、単位音調にまつわる理論的な整備と説明力の拡充を図る必要がある。

謝辞

本研究で引用した資料の採取に貴重な時間を割いて尽力してくださったインフォーマントの方々に改めてこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。また、本研究の基盤となる研究発表や学会発表の際に貴重なコメントを下された聴衆の方々にもお礼を申し上げます。最後に、本稿の内容に関して貴重な助言を下された2名の査読者の方々にも、この場をお借りして謝意を表する。

参考文献

Abercrombie, David (1976). *Elements of General Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

- アジア・アフリカ言語文化研究所 (1967). 『アジア・アフリカ言語調査票 下』. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Aasen, Ivar (1848). *Det norske folkesprogs grammatik*. Kristianina: Werner & Comp.
- Basbøll, Hans (2008). “Stød, diachrony and the non-stød model.” *NOWELE: North-Western European Language Evolution* 54/55, pp. 147-189.
- Boersma, Paul and David Weenink (2021). *Praat: doing phonetics by computer*. Version 6.1.54. URL: <https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>.
- Bolinger, Dwight L.(1958). “A theory of pitch-accent in English.” *Word* 14, pp. 109-149.
- Borgstrøm, Carl Hj. (1938). “Zur Phonologie der norwegischen Schriftsprache.” *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 9, pp. 250-275.
- Den Danske Ordbog*. <https://ordnet.dk/ddo> 【2019年2月28日閲覧】
- Elert, Claes-Christian (1970). *Ljud och ord i svenskan*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Fintoft, Knud (1970). *Acoustical Analysis and Perception of Tonemes in Some Norwegian Dialect*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Grønnum, Nina (1992). *The Groundworks of Danish Intonation: An Introduction*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press.
- Grønnum, Nina (2007). *Rødgrød med fløde: en lille bog om dansk fonetik*. København: Akademisk forlag.
- Gårding, Eva (1974). *Kontrastiv prosodi*. Lund: CWK Gleerup.
- Haugen, Einar (1967). “On the rules of Norwegian tonality.” *Language* 43, pp. 185-202.
- Haugen, Einar and Martin Joos (1952). “Tone and intonation in East Norwegian.” *Acta Philologica Scandinavica* 22, pp. 41-64.
- 早田輝洋 (1977). 「生成アクセント論」. 『岩波講座日本語 5 音韻』. 東京: 岩波書店, pp. 323-360.
- Hyman, Larry M.(1975). *Phonology: Theory and Analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Jensen, Martin Kloster (1961). *Tonemicity: A Technique for Determining the Phonemic Status of Suprasegmental Patterns of Pairs of Lexical Units, applied to a Group of West Norwegian Dialects and Faroese*. Årbok for Universitet i Bergen, Humanistisk Serie 1961 No 1. Oslo and Bergen: Norwegian Universities Press.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編著 (1996). 『三省堂言語学大辞典 第6巻 術語編』. 東京: 三省堂.
- 川上蔡 (1961). 「言葉の切れ目と音調」. 『國學院雑誌』 62-5, pp. 67-75.
- 川上蔡 (1973a). 『日本語アクセント法』. 東京: 学書房.
- 川上蔡 (1973b). 「日本語と北欧語の高さアクセント」. 日本音声学会編. 『音声の研究』 16, pp. 331-346.
- 川上蔡 (1995). 『日本語アクセント論集』. 東京: 汲古書院.
- 川上蔡 (2000). 「具体音声から抽出されるもの」. 東京大学国語国文学会編. 『國語と國文学』 9月号. 東京: 至文堂, pp. 1-14.
- Kristoffersen, Gjert (1993). “An autosegmental analysis of East Norwegian pitch accent.” Björn Granström and Lennart Nord, eds. *Nordic Prosody VI: Papers from a symposium*. Stockholm: Almqvist & Wiksell, pp. 109-122.
- Krisitoffersen, Gjert (2000). *The Phonology of Norwegian*. Oxford: Oxford University Press.
- Kristoffersen, Gjert (2006). “Tonal melodies and tonal alignment in East Norwegian.” Eds., Gösta Bruce and Merle

- Horne. *Nordic Prosody: Proceedings of the IXth Conference, Lund 2004*. Frankfurt am Mein: Peter Lang.
- 窪菌晴夫 (2002). 「音節とモーラの機能」. 窪菌晴夫、本間猛編. 『音節とモーラ』. 東京: 研究社, pp. 1-96.
- Lehiste, Ilse (1970). *Suprasegmentals*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lorentz, Ove (1981). “Adding tone to tone in Scandinavian dialects.” Ed., Thorstein Fretheim. *Nordic Prosody II*. Trondheim: Tapir, pp. 166-180.
- Lorentz, Ove[sic. Ove?] (1984). “Stress and tone in an accent language.” Eds., C.-C. Elert, et al. *Nordic Prosody III*. Stockholm: Almqvist & Wiksell, pp. 165-178.
- 三村竜之 (2005). 「ノルウェー語ピッチアクセント再考」. 『日本言語学会第 130 回大会予稿集』, pp.68-73.
- 三村竜之 (2008). 「デンマーク語モーラ説の批判的考察」. 『東京大学言語学論集』 27, pp. 147-61.
- 三村竜之 (2010). 「ストレスアクセントの多様性: ストレスアクセントの類型論に向けて」. 『東京大学言語学論集』 29, pp. 183-193.
- 三村竜之 (2013). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言のモーラ: 記述言語学的な視点から」. 北海道言語研究会編. 『北海道言語文化研究』 11, pp. 49-62.
- 三村竜之 (2014). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈」. 『室蘭工業大学紀要』 第 63 号, pp. 77-91.
- 三村竜之 (2019a). 「ノルウェー語南東部方言における音調のアクセント論的解釈」. 第 14 回音韻論フェスタ (2019 年 3 月 15 日, 明海大学浦安キャンパス).
- 三村竜之 (2019b). 「ノルウェー語のアクセントとイントネーション」. 北海道言語研究会 第 17 回研究例会 (2019 年 3 月 22 日, 室蘭工業大学).
- 三村竜之 (2021a). 「デンマーク語における疑問文のイントネーション」. 『室蘭工業大学紀要』 第 70 号, pp. 99-114.
- 三村竜之 (2021b). 「デンマーク語 stød 研究の諸問題: 通時論と共時論の両側面から最善の音韻解釈を探る」. 国立国語研究所プロジェクト共同研究「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第 7 回オンライン研究発表会, 2021 年 6 月 4 日.
- Oftedal, Magne (1952). “On the origin of the Scandinavian tone distinction.” *Norsk tidsskrift for sprogvidenskap* 16, pp. 201-225.
- Rischel, Jørgen (1960). “Über die phonematische und morphophonematische Funktion der sogenannten Worttöne im Norwegischen.” *Zeitschrift für Phonetik und allgemeine Sprachwissenschaft* 13, pp. 177-185.
- Selmer, Ernst W. (1920). “Enkelt og dobbelt tonelag i Kristianiasprog.” *Maal og Minne*, pp. 55-75.
- Statistisk sentralbyrå*. <https://www.ssb.no/> 【2021 年 10 月 30 日閲覧】
- 上野善道 (1980). 「アクセントの構造」. 柴田武編. 『講座言語第 1 巻 言語の構造』. 東京: 大修館書店, pp. 87-134.
- 上野善道 (1984). 「N 型アクセントの一般特性について」. 平山輝男博士古稀記念会編. 『現代方言学の課題』 2 (記述研究篇). 東京: 明治書院, pp. 167-209.
- 上野善道 (1989). 「日本語のアクセント」. 『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』. 東京: 明治書院, pp. 178-205.
- 上野善道 (1997). 「私のアクセント理論: フィールドワーカーの視点」. 『音声研究』 1-2, pp. 28-36.

- 上野善道 (2001). 「日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ」。『国語研究』 64, pp. 8-16.
- 上野善道 (2003). 「アクセントの体系と仕組み」。上野善道編。『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』。東京: 朝倉書店, pp. 61-205.
- 上野善道 (2005). 「音の構造」。風間喜代三, 上野善道, 松村一登, 町田健。『言語学 第2版』。東京: 東京大学出版会, pp. 195-250.
- 上野善道 (2011). 「アクセント単位」。城生佰太郎, 福盛貴弘, 斎藤純男編著。『音声学基本事典』。東京: 勉強出版, pp. 320-323.
- Vanvik, Arne (1961). “Three tonemes in Norwegian?” *Studia Linguistica* 15, pp. 22-28.
- Vanvik, Arne (1985). *Norsk Uttalerodbok / A Norwegian Pronouncing Dictionary*. Oslo: Fonetisk institut, Universitet i Oslo.

執筆者紹介

氏名：三村竜之（みむら・たつゆき）

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化系領域・准教授

Email：m76tatsu@gmail.com